world
from Dawn till Dusk

world
from Dawn till Dusk

世界
の夜明けから夕暮れまで

www.wfdtd.pl

欧州連合理事会議長国就任期間中の公式ポーランド文化プログラム

Ministry of Culture and National Heritage

ポーランド文化・国家遺産省
大臣――ボグダン・スドロイェフスキ大臣

I, CULTURE culture.pl
Adam Mickiewicz Institute

アダム・ミツキェヴィチ・インスティトゥート
代表――パヴェウ・ポトロチン

POLSKI INSTYTUT SZTUKI FILMOWEJ

ポーランド・フィルム・インスティトゥート
代表――アグニェシュカ・オドロヴィチ

TVP
TELEWIZJA POLSKA

ポーランドＴＶ局
番組編成部長――イェジ・カプシチンスキ

БЕЛСАТ tv
BELSAT

ベルサトTV局
局長――アグニェシュカ・ロマシェフスカ＝グズィ

EVEREST

エヴェレスト・スタジオ
代表――ミロスワフ・デンビンスキ

本プロジェクトは、ポーランド文化・国家遺産省、ポーランド・フィルム・インスティトゥートとの共同出資によって実施されています。

skład/DTP-Radosław Libiszewski korekta-Katarzyna Pergół

www.wfdtd.pl

MMXI

世界の夜明けから夕暮れまで
映画教育プロジェクト

発案者：

マチェイ・Ｊ・ドルィガス
ミロスワフ・デンビンスキ

協力：

マルツェル・ウォジンスキ　ヤツェク・ブワヴト
ヴィタ・ジェラケヴィチュテ　マテウシュ・ヴェルネル
パヴェウ・ウォジンスキ　ヤツェク・ペトルィツキ
ラファウ・リストパト　アンジェイ・ムシャウ

Idea

私たちは毎日、ＴＶで世界中の映像を見ています――戦争、地震、政治デモ、サッカーの試合、証券相場、ファッション・ショー。重要な事件は、あらゆる場所から、リアル・タイムで私たちに伝えられてきます。しかし、これが私たちの世界に関する真実のすべてでしょうか？　それとも、その表面的な投影にすぎないのでしょうか？　「ヘッドライン・ニュース」の表層の下にあるものを、より深く見ることはできないのでしょうか？　北京の魚市場の売り子の微笑や、モスクワの地下鉄にいる物乞いの思索的な容貌の方が、現代世界とその状況について、私たちにより多くを物語っているのではないでしょうか？
私たちは、ウッチ映画大学の学生たちに、現実観察という記録映画製作メソッドを提案しました。数年間にわたって、「ウッチの夜明けから夕暮れまで」というプロジェクトを、実施してきました。
この度、私たちは、私たちと同じ仕事をしている、ヤツェク・ブワヴト、マルツェル・ウォジンスキ、ヴィタ・ジェラケヴィチュテ、パヴェウ・ウォジンスキ、ヤツェク・ペトルィツキ、ラファウ・リストパトなど、著名なポーランドの記録映画作家、映画製作スタッフ、映画批評家を招き、世界の５大首都で「世界の夜明けから夕暮れまで」というプロジェクトを実現することにしました。ミンスク、キエフ、モスクワ、北京、東京の映画大学学生は、自分の都市についての記録映画を撮ります。それは、私たちが毎日テレビで見ているものとはまったく別の映像になるはずです。
このようにして生まれた映画連作は、私たちの現代世界についてより深く考察するための出発点になるかもしれません。

ミロスワフ・デンビンスキ、マチェイ・ドルィガス

Project

『世界の夜明けから夕暮れまで』は、ポーランドの優れた記録映画作家グループが、世界5都市――ミンスク、キエフ、モスクワ、北京、東京――の映画大学学生たちを対象にワークショップを開くというプロジェクトです。各ワークショップのなかで、1時間の記録映画が製作されました。肖像画です。ワークショップと映画製作の方法は、ミロスワフ・デンビンスキとマチェイ・ドルィガスの発案によって、数年前からウッチ映画大学学生を対象に実施されている『ウッチの夜明けから夕暮れまで』に依拠しています。
本プロジェクトは、ポーランド文化・国家遺産省のコンペで高い評価を受け、ポーランドがＥＵ議長国を務める期間の公式文化プログラムに選ばれました。
企画に対して、ポーランド・フィルム・インスティトゥートから、「外国におけるポーランド映画振興」ならびに「映画製作」に関する優先プログラムとして、資金提供を受けました。
ポーランド第2ＴＶ局とベルサトTVが、映画の共同製作にあたりました。ポーランド全国ならびに衛星放送で放映されます。

本企画は、ポーランド外務省からも好意的に迎えられ、各都市におけるポーランド外交代表部から組織面と資金面で援助を受けました。
本プロジェクトのフィナーレは、「ワルシャワから世界一周してブリュッセルまで」という一連の上映会で、そこでは、製作された映画と指導教員たちの作品が披露されます。ワークショップの作者全員が、ワルシャワからミンスク、キエフ、モスクワ、北京、東京を経てブリュッセルに至る旅に出かけます。各都市で学生たち、そして一般の観客と出会い、ワークショップで作られた5本の映画と自らが撮った最も興味深い作品群を上映するのです。

The explanation how to carry out the project

『世界の夜明けから夕暮れまで』は、ミロスワフ・デンビンスキとマチェイ・ドルィガスの発案によるプロジェクトです。世界のさまざまな都市で、映画大学学生のために開いてきた、ワークショップの経験に基づくものです。学生たちは教授の芸術的指導を受けて、ひと月間で、都市を主人公に数本の記録映画を共同製作します。最終的に、いくつかの都市の肖像画を描いた、各1時間の記録映画連作が生まれます。

芸術面での前提条件
一人一人の学生は、1時間の時間帯を選び、その時間に継起するシチュエーションを探します。短い記録映像の一つ一つが、劇的構造を持つ独立した全体です。同時に、それらが全部集まって、1時間の記録映画を構成するのです。
一人一人の学生は「自分の時間」の映画を考え出します。そして、学生グループ全員で作る複数の映画が、一都市の「夜明けから夕暮れまで」の肖像画を構成します。さらに、全部の映画が集まって、「世界の夜明けから夕暮れまで」を描き出すことになるのです。

形式面での前提条件
映画エチュードは、演出や挑発を用いない観察のメソッドによって作られなくてはなりません。映画ジャーナリズムとはかけ離れたものです。
1本1本の映画は、4-5分の長さが適当です。時間の制約を設けることで、視覚的に劇的な構成と簡潔さが保証されます。1本ずつの短編映画、そして完成した映画作品は、「細部（ディテール）から暗喩（メタファー）へ」の手法を用いて、構成されるべきです。

教育面での前提情景
プロジェクトはワークショップ形式で実施され、映画製作の全段階において、教員と学生たちが力を合わせます。
―都市のさまざまな空間における映像ロケハン
―プロジェクトを選び出し、それを観客に見せる能力
―シナリオを構成し、撮影された素材を各エチュードならびに映画の全体を考慮して分析すること（個人的・集団的な芸術的責任）
―編集、その際、より高次な意味レベルを構築する能力を特に重視する（映像と音声空間の間に有機的関連性を生み出すこと）

ワークショップ
教師と学生の出会い

●モスクワ（ロシア）

記録映画製作ワークショップ「モスクワの夜明けから夕暮れまで」は、ゲラシモフ映画大学のシナリオ監督上級コースの学生たちの参加を得て、2011年6月24日〜7月9日に行われた。指導教員は、マチェイ・ドルィガス、アンジェイ・ムシャウ、マテウシュ・ヴェルネル、マレク・スクシェチの４人。学生全員が参加する３日間の企画プレゼンテーション＋ディスカッションで、２５の企画が選び出され、製作に回された。各学生は、映画のテーマのロケハンをすませた後、一日だけ技術スタッフと機材を与えられて撮影に出た。その後、教員と共にラッシュを見て、ラフカットを製作。最終的に４分の映画が10数本できあがった。雰囲気、主題、登場人物、語りを異にするドキュメンタリーが、それぞれ大都市の生活の別の一面を描き出している。個人の心理描写があるかと思えば、兵舎の生活の情景、監視カメラ・センター、地下鉄、拘置所も描かれる。年金生活者の住宅やアフガニスタンからの移民などが住む質素なアパートの一室を訪れ、モスクワの富裕な家族のマンション内部を見、市街地にあるロシア正教の鐘楼へ登り、孤独な独身生活者に人気がある青空ディスコ「レトロ」やファッショナブルな高級ナイトクラブを訪れる。また、ソーシャルワーカー、地下鉄保安員、ロシア語教師、そして「モスクワの共産主義青年同盟」編集部員の仕事を観察する。このような多彩色の小石が組み合わされて、ロシアの首都・モスクワの現在をえがくモザイク様式の肖像画が生まれる。

●キエフ（ウクライナ）

キエフのワークショップは、2011年7月8日〜23日に実施された。プロジェクトの共催機関は、キエフにあるカルペンコ＝カリー記念演劇映画テレビ大学。ポーランドの著名なドキュメンタリー作家三名、マルツェル・ウォジンスキ、ヴィタ・ジェラエヴィチュテ、ヤツェク・ブワウトが指導にあたった。シナリオ作成とラッシュ上映は、スジリャ劇場で行われた。参加者は、カルペンコ＝カリー記念演劇映画テレビ大学演出および撮影専攻の学生とウクライナの若手映画作家である。初日の授業はアイデアのプレゼンテーション、その中から興味深いアイデア10数本が選び出された。その後の数日間に、学生たちとポーランド人教師はアイデアを練り上げ、シナリオを書き改め、撮影班を編成して、撮影の準備を行った。撮影はほとんどすべて、ドニエプル川の観光船「リヴァレスト」上で行われた。これは、製作担当者にかなり困難な課題を突きつけることになった――撮影班の作業日程を船の運行時刻表に合わせなくてはならなかったのである。学生の撮影グループは、観光船に、お互いに異なる多種多彩な人々を招いた。映画の中で、彼らが一堂に会する。大富豪、ウクライナ正教の司祭、元気いっぱいの老婦人たち、若いミュージシャン……こうした人々の会話から、何か興味深いことが見えてくるのではないか？　映画の作者たちがねらったのは、人々の間に生まれる関係であり、それを通して、愉快で心温まるキエフの肖像画を描くことだった。

●東京（日本）

東京でのワークショップは、2011年8月5〜18日に、川崎市の日本映画学校で催された。ワークショップの監督にあたったのは、佐藤忠男、千葉茂樹両教授。久山宏一氏が、通訳と企画コーディネートの労を引き受けた。ワークショップを指導したのは、高い評価を受けているポーランドの映画人パヴェウ・ウォジンスキ、ヤツェク・ペトルィツキ、ラファウ・リストパト、マレク・スクシェチだった。彼らは、参加者たちに職業経験を伝え、記録映画における演出・撮影・音声録音の秘訣を教えた。「東京の夜明けから夕暮れまで」の編集はラファウ・リストパトが担当した。日本の若い映画作家は、教師とともに、「東京の夜明けから夕暮れまで」のコンセプトを構築しようとした――メトロポリス東京の日常生活を描き出す最良の方法を探したのである。まだヨーロッパの観客が知らない、伝統と超近代の間に宙づりになったコントラスにあふれた東京を見せようとした。この街には、慌ただしいテンポと新しい生活様式があり、同時に、日々の儀式が重んじられ、伝統が尊ばれている。私たちはスクリーンに観ることだろう――銕仙会の観世銕之丞が若い弟子を指導する風景を、お盆の行事を、さらには通行する人々にマンガを読みあげることで生計を立てている若者を。

● 北京（中国）

北京ワークショップは、新学年のはじまりにあたる2011年8月26日～9月10日に、中国伝媒大学(CUC)の協力で催された。同大学の演出、撮影、編集専攻の上級生が参加した。ヴィタ・ジェラエヴィチュテ、マルツェル・ウォジンスキ、ヤツェク・ブワヴトの３名の優れたドキュメンタリー作家が、参加者たちの映画を芸術面で指導した。編集は、プシェムィスワフ・フルシチェレフスキが担当した。学生は困難な課題を引き受けた――とても積極的かつ創造的で、プロジェクトに熱心に参加した。それぞれがいくつかのテーマを提案し、授業最初の数日間に、学生と教師は協力して、最も興味深いものを計26本選び出し、製作に回した。続く10日間に、若い映画人たちは過酷な作業を行った。日の出と共に起き、それぞれの主人公を追って遠距離を旅した。撮影終了後、ポーランド人教師とともにラッシュ・フィルムを分析し、ポーランドの編集担当者とともにその編集を行った。作者たちは、北京の生活をさまざまな色合いで描き出そうとした――ステレオタイプを打ち壊し、中国のメトロポリスの未知で意外な表情を引き出しながら。

● ミンスク（ベラルーシ）

ミンスクでのワークショップは、2011年9月16日～10月1日に催された。ミンスク私立映画学校が、ワークショップに協力した。参加者は、ミンスク国立美術大学、ミンスク私立映画学校の学生、ベルサトTV局のディレクター、その他の若く才能ある映画人たちである。パヴェウ・ウォジンスキとヤツェク・ペトルィツキがワークショップを指導した。マレク・スクシェチが編集を指導した。ワークショップはプレゼンテーションに始まり、参加者と教授たちが最も優れた企画を20本選んだ。それからの数日間は、シナリオをめぐる集中的な作業、技術指導、ロケハンにあてられた。これは、撮影という極めて困難な作業に備えるためだった。現代のミンスクを、たった2週間で映画化するのは生易しいことではない。作者たちは、ふだんお目にかかることができないような人物の日常生活を描こうとした。映画は、彼らの興味深い肖像画の集成である――キリスト教の福音を説くタクシー運転手はどのような生活を送っているのか、韻文で語る孤独な老人とセクシー・ダンスを踊る女性は何を隠しているのか、なぜウェディング・フォトグラファーは自分の結婚相手を見つけられないのか？

記録映画コレクション
都市の肖像画

ミンスクの夜明けから夕暮れまで

運動着の数人の若者が、街を駆け回る――壁、階段、公園のベンチ、ときには記念碑を、跳躍やとんぼ返りや着地への現実の障害物として乗り越えながら。ベラルーシの首都ミンスクのパルクールだろうか。そうだとして、何の不思議があるだろう？　カメラはあたかも、彼らの目になったかのようだ――飛び回りながら、戦勝記念碑の前の衛兵交代、地下街の通行人、歩行者天国にいる人々を視野におさめていく。ときに速度をゆるめ、タクシーの車内、教室、実験室、そしてピアノのレッスンをのぞく。それぞれの場所に主人公がいる――忘れがたい人物たち、物語のその後の進行にはっきりと足跡を残す人物たちだ。鮮明で陰影鮮やかな彼らの肖像は、私たちの目の前に、ベラルーシの生活を隠しそれを謎めいた別世界のように思わせているカーテンを、一瞬だけ開いてみせる。

ワークショップ参加者

Masha Areh
Igor Bogachyk
Lina Chaykovsaya
Elena Chekina
Kiryla Ciareszka
Yulya Demianenko
Tatiana Dubitskaya
Aleh Dzerbianiov
Albert Ermakoff
Natali Figurovskaya
Ekaterina Filanovich
Yuri Golaido
Arseniy Hachaturyan
Andrei Ivanenko
Daria Kaleda
Viktoryia Kolchyna
Sergei Kovalev
Nikita Kostiykevich
Aleksey Kozlouvski
Ekaterina Krychko
Ivan Kurakevich
Lubov Lebedeva
Nata Lipatova
Andrey Minin
Ilya Mrochko
Dmitry Negrienko
Anton Nehay
Julie Ralko
Pawel Romanenya
Kate Romashco
Semion Shablyko
Aleksey Zhygalkovich
Tatiana Sivak
Nastassia Siamenchyk
Pavel Skakun
Anna Skrinnik
Alexander Svishchenkov
Ekaterina Trifonova
Dmirty Vishnyakov
Konstantin Zamirovskiy

共催

Minsk Filmschool-Studio
Andrei Polupanov
Svetlana Yatsyno
Polish Institute in Minsk
Wiesław Romanowski

協力

Elżbieta Szczepańska-Dąbrowska
Church of Saints Simon and Helen, Father Władysław Zawalniuk, Franek Wiaczorka, Ekaterina Przybylska, Sergey Katier, Olga Dashuk, Kamil Mardanakulov, Galina Karpovich, Andrey Tchverko, Aleksander Volk, Sergey Katier, Irina Uyshchenko, Marina Lemesheva, Alexey Livansky, Diana Sarkis, Polina Biryukova, Music school №10 of Minsk, Kazimir Dmitrievich Karpenka, Ianina Shirokova, Igor Filipovich, Lena, Nikita Vasilevski, Aleksander Volk, Anastasia Brusnikina, night club Antalya, Sergey Yagelo, Olga, Ahiyevich Yury, Kruglik Vadim, Elsa Ringhoeven, Uladzimir Palazhanka, Nastassia Palazhanka, Mikalay Dzemidzenka,Tishuk Alexander

All the workshop participants and everybody who helped by during the workshop

ワークショップ指導

総監督:
Paweł Łoziński
Jacek Petrycki

編集:
Marek Skrzecz

製作統括:
Victoria Ogneva

アドバイザー:
Victor Asliuk

製作コーディネーター:
Katarzyna Pergół

企画（ベルサト):
Jarosław Kamieński

製作統括（ベルサト）:
Sergiej Pielesa

音声:
Grzegorz Lindemann
Studio Melange

キエフの夜明けから夕暮れまで

ある晴れた夏の午後。キエフの住人たちが、小さな遊覧船に乗り込んで、新鮮な空気と日光浴、そして壮大な眺めを目指して出発する。若い人たちがいる――学生たち、新婚カップル。年輩の人たちもいる――退役軍人、年金生活の老人たち。たまたまキエフに立ち寄った旅行者たち。彼らを結びつけているのは、川下りという共通の目的だ。ドニエプル川クルーズ船で2，3時間を一緒に過ごすのである。自ら話し相手を選び、自分の夢や人生・神・愛・金銭の意味について語り合い、過去と現在の歴史について議論し、その場限りの恋をする。人々は陽気で、浮気で、真剣で、内省的だ。彼らの驚くほどオープンで自由な出会いと語り合いは、今日のウクライナの表情を垣間見せてくれる。

ワークショップ参加者

Yana Antonets
Aleksander Babenko
Grigirij Bilik
Denis Demchenko
Alexander Dudnik
Yuri Dunay
Lyubov Durakova
Natalia Egorova
Ruslan Girin
Lidiya Huzhva
Modievskij Igor
Alisa Kovalenko
Pavel Levchuk
Andrei Litvinenko
Michail Lubarskiy
Ivan Lubish-Kirdei
Aleksander Marinuk
Aleksander Mashtaler
Lesya Matsko
Lena Menzhyl
Sergei Nikiforov,
Andrei Rogachev
Ekaterina Morozova
Igor Prokofiev
Tatiana Prisiahznaya
Nikon Romanchenko
Maksim Shipov
Dmytro Suholytkyj-Sobchuk
Vladimir Usik

共催

Kiev National Theatre, Film and Television University named after Karpenko-Kary
Polish Institute in Kiev
Jarosław Godun
Olena Babij

協力

Tatiana Artuszewska, Kiev Academic Theatre „Suzirya", Director Aleksey Kuzhelniy, Ekaterina Morozova, Dmitry Abezyaev, Olena Podolska, Yuri Dunay, Company Riverest, Director Denis Molotkovets, Team of the ship Riverest – 2 „Tiger", Captain Vladimir Stetsenko, Aleksander Knizhenko, Vadim Filyk, Vladimir Steshenko, Artem Savchuk Federation of walking named after Shimko, Hem Elizarovich Solganik, Olexander and Mary Pravik, Sergey Triashin, Yuri Parchomenko, Father Maksim, Boris Yeghiazaryan, Denis Dreiman, Julia Makarenko, Ruben, Sasha, Roma, Sergei, Les Beley, Andriy Lyubka, Vasiliy Romanuk, Dmitro Zaharevich, Karina, Mariana, Yana Filonenko, Lesya Morgunets-Isaenko and Andrei Isaenko, Elena Anatolievna, Dima Gromov, Grigory Mosko, Katerina Matyakina, Dmitry Gromov, Zoriana Kirilenko, Valentin Piskun, Viktor Kobylinskij, Vano Kriuger, Dasha Bondarchuk, Oleg, Nenia, Sviatoslav Fehtel, Natali Demchenko, Leonid Demchenko, Elizavata Zagoruy, Aleksander, Nikita and Ksenia Zaplavski.

All the workshop participants and everybody who helped by during the workshop

ワークショップ指導

総監督:
Jacek Bławut
Marcel Łoziński
Vita Żelakeviciute

編集:
Weronika Bławut

編集助手:
Svitlana Topor

製作統括:
Victoria Ogneva
Magdalena Borowiec

製作統括（キエフ）:
Sergiy Ostapchuk

通訳・翻訳:
Marta Sachnevich
Yana Filonenko
Svitlana Topor
Margarita Prokopenko
Elena Sheremet

製作コーディネーター:
Katarzyna Pergół

企画（ポーランドTV局）:
Barbara Paciorkowska

製作統括（ポーランドTV局）:
Witold Będkowski

音声:
Michał Kosterkiewicz

モスクワの夜明けから夕暮れまで

10数個の多彩な小石が組み合わされて、現代ロシアの巨大なメトロポリスのモザイクを作り上げる。それらは一見すると、お互いにまったく異なっているように見える――ロシア正教の司祭、徴兵された若者、孤独な老人、アフガニスタン移民の家族、地下鉄保安員、電話相談を受けるカウンセラー。彼らはそれぞれ別の空間にいる。それぞれの時間は、別のテンポで流れる。それぞれが、周囲の人々との間に持つ関係も、違っている。しかし、超クローズアップで撮られたこれらの映像が集まって、ある模様を形作っているのが読み取られる。モチーフ、オブジェ、状況が回帰する。同じ言葉が回帰する。モスクワの演出クラス上級学年の若い映画作者たちは、意外なほど首尾一貫した色彩で描かれた集合的自画像を創り上げた。

ワークショップ参加者

Anna Arevshatyan
Victor Belanov
Aleksey Burlutsky
Tatiana Churus
Philipp Dubrovsky
Semyon Galperin
Maria Guskova
Denis Guskov
Jen Shen Gur
Vasily Grigolyunas
Anna Kogan
Natalia Kudryashova
Elena Kuznetsova
Dmitry Lebedev
Ekaterina Morozova
Lena Morozova
Igor Mikhalychev
Ekaterina Nasedkina
Nadezhda Naumova
Anna Nekludova
Asya Nikolaeva
Aleksey Perevalov
Anna Rubtsova
Dmiry Ruzov
Sophia Safayeva
Inga Schepanovskaya
Aleksandr Tiskinuk
Andrew Vorobiev
Lika Yatkovskaya
Vladislava Zablotskaya
Andrey Zubarev

共催

Higher Courses of Screenwriters and Directors
Director Vera Sumenova

Polish Institute in Moscow
Director Marek Radziwon

協力

Father Aleksey Lopatin, rector of Saint Nicholas Church at Tverskaya Zastava,Mikhail Baryshev, commander of Detached Commandant Regiment, Aleksander Kurov, assistant commander, Psychological Aid of EMERCOM of Russia Emergency Centre, Moscow Planitarium, Bordunov Andrei, Artuhina Natalia, Kazantseva Anastasia, Kostina Ekaterina, Vernadskij Department of Civil Registration; press office, Ivan Besedin head of Moscow Metro, Sergey Tsygankov head of press-office of Federal Penitentiary Service, Dmitry Piven, Tamara Ryabova, Vasily Bochkarev, Natalie Dolanova, Alevtina Doumpé, Alla Dvorenets, Vitali Neiman, Elena Kolesnichenko, Ekaterina Ptashkina, Natalia Zaitseva and Nadgib, Sidika, Kaiz, Belal, Idris, Causar, Mugda Tahiri, Irina Perova, Irina Neugasova, Galina Grigorenko, Lyudmila, Oksana, Nadezhda, Nastya and Vika, Nikita Tataev, Taras Kozyura, Konstantin Semin
All the workshop participants and everybody who helped by during the workshop

ワークショップ指導

総監督:
Maciej J. Drygas
Andrzej Musiał
Mateusz Werner

編集:
Marek Skrzecz

製作統括:
Victoria Ogneva

製作統括（モスクワ）:
Dmitry Abezyaev
Diana Shalashnaya

通訳・翻訳:
Victoria Ogneva

製作コーディネーター:
Katarzyna Pergół

企画（ポーランドTV局）:
Barbara Paciorkowska

製作統括（ポーランドTV局）:
Witold Będkowski

音声:
Iwo Klimek

作曲
Victor Belanov

北京の夜明けから夕暮れまで

三輪タクシーを運転する病弱な老女は、私たちの知り合いだ。彼女は、一日中、この巨大な街のあちこちへ顧客を運ぶ。街の貧しい一角にある質素なアパートに夫と二人で住んでいるが、「自分は成功者だ」と言う。彼女は、家長であり、立派に子どもたちを育て上げた。2，3年前に、党は身体の不自由な彼女にオートバイを贈ったのだった！　自分の人生を振り返り、昨今と違い、お金が人々を支配していなかった文革時代を懐かしそうに思い出す。私たちは、政治経済の両面で転換期にある、北京の姿を画面に観る。天安門広場の巨大な毛沢東の肖像画の下では、衛兵交代の儀式が行われているけれども、それを眺める市民は、まるで、異国情緒豊かな過去の遺物をのんびりと写真に収める観光客のようだ。公民教育の授業では、生徒たちが最も良い政治哲学は何か討論している――儒教と仏教と老荘哲学の違いを議論する。一方、街を散歩している私たちは、共産主義闘争時代の歌を意気揚々と歌う通行人のグループに出くわす。商業銀行の巨大なビルの傍らで、革命の敵へ血の復讐を誓う歌を歌う彼ら……。映画にはこうした逆説があふれ、それが一義的に定義しきれない、興味深いスナップショット集を構成している。

ワークショップ参加者

Yang Wanshu
Wang Yu
Li Wa
Shao Cheng
Huang Jingjing
Liu Fang
Yun Bing
Chen Xinyue
Shang Shan
Zhang Wanyi
Sun Mengying
He Xin
Ding Yike
Yuan Lai
Fan Di
Guo Manli
Xia Tian
Xie Weiwei
Sun Yifan
Zhang Xiang
Yang Chen
Li Xing
Jia Ran
Sun Bowen
Gao Youning
Han Yilu
Li Changchang
Li Xinyi
Lu Yufei
Song Wenjia
Zhang Lin.

共催

Communication University of China (CUC)
School of Drama, Cinema & TV
Dean Li Xingguo,
Vice Dean Pu Jian

Embassy of the Republic of Poland in Beijing
Counsellor Maciej Gaca
Renata Szostek, Mariusz Jezierski

協力

Beijing no 17 Middle School, Pu Jian, Xu Zhipeng, Miaotong Yuan

ワークショップ指導

総監督:
Jacek Bławut
Marcel Łoziński
Vita Żelakeviciute

編集:
Przemysław Chruścielewski

製作統括:
Magdalena Borowiec

製作統括（北京）:
Xu ZhiPeng

通訳・翻訳:
Mariusz Jezierski
Katarzyna Kilian

製作コーディネーター:
Katarzyna Pergół

企画（ポーランドTV局）:
Barbara Paciorkowska

製作統括（ポーランドTV局）:
Witold Będkowski

音声
Grzegorz Lindemann
Studio Melange

東京の夜明けから夕暮れまで

この映画に描かれる夜明け、それは都市の目覚めである。人々がベッドから起き出す。私たちはそれを見たいと思う――日本人はどんな風に寝ているのだろう？　その後、通りや広場での朝のラジオ体操が始まる――通行人の群は、身体を前に曲げ、捩じり、飛び上がる。見慣れた情景だ。しかし突然、裸の相撲取りたちが姿を現す。巨人たち。心優しい男たち。子どもや老人と一緒に、体操をする。カメラが辛抱強く見つめていると、肖像画を描く夫婦、肉屋での買い物、手相占いといったどこにでもある風景に、第二の謎めいた意味が現れてくる。輪郭はよく知られ、ときに通俗化してさえいるが、映画のショットとショットの合間のどこかに、この世界の特異性・個性・理解しがたさが隠れている。過去の大戦の悪夢や最近の福島の大震災に関する集合的記憶に触れた部分は、東京という都市の普通の情景と強烈な対照を成している。

ワークショップ参加者

Shimada Ryuichi
Park Jebum
Ito Ryotaro
Nagase Yasumi
Yamashita Daisuke
Okoshi Yasuo
Tateishi Ippei
Katsube Takuto
Kameyama Mio
Iida Ai
Takei Toshiyuki
Takahashi Sota
Takahashi Saki
Jo Ara
Yun Sangsook
Tanaka Kei.

共催

Nihon Eiga Gakko
Director Tadao Sato (Japan Institute of the Moving Image)
Director Shigeki Chiba (Japan Academy of Moving Images)
The Embassy of the Republic of Poland in Tokyo
Ambassador Jadwiga Rodowicz-Czechowska
Counsellor Mirosław Łuczko

協力

Yoshimi Chiba, Profesor Kenzo Horikoshi (Tokyo University of the Arts), Profesor Seiichi Miyazawa (Nihon University), Iseya, EmikoTakahashi, Teppei Kikuchi, Susumu Hanagata, Juzo Onuki, Toshiko Onuki, Kenichi Tani, Hideto Azumaya, Sachiko Ishimaru, Hiroo Inoue, Kenji Ohara, Motoko Kato, Motoki Saga, Hiroshi Shibahara, Noriko Tanaka, Kenichi Tsukagoshi, Rina Nakamura, Takahiro Hosoya, Natsumi Hori, Aki Momoka, Miki Mori, Rinataro Yoshinaga, Eri Wakabayashi, Michiaki Kubota, Kenichi Tani, Saori Tanaka, Koro, Yusuke Hisawa, Takeshi Hongo, Reo Tamaki, Kenshiro Nakata, Tatsuya Ito, Junichi Hirota, Mimuru Komatsu, Tsuyoshi Oguri, Suguru Yamamoto, Hideto Azumaya, Yurika Fukaya, Michiko Murata , Yumego-an, Rikimaru Toho, Hiroto Nitta, Yuko Nitta, Kaito Nitta, Minami Nitta, Toru Honda, Masaki Yamamoto, Fortune-teller from Asakusa District, Tomoe Unuma, Hana Unuma, Kimiko Ida, Mitsuaki Iida, Daiki Iida, Chieko Murakami, Junko Shiraishi, Tokyo Japan Dance Circle Shinboku-kai, Asakusa Hospital, SHARE (Health for ALL[NGO]), Hospice Hope House, SNG (Shinjuku Nihongo Gakko), Hanagata Boxing Gym, Kawasaki-city Asao-ward Office, Community Health and Social Welfare Section Health and Welfare Center (Kawasaki-city Aso-ward Office), Walking Promotion Committee in Asao Ward, Park Yamaguchidai-Hakusan, Asao Fire Station (Kawasaki-city), Radio Gymnastics Club in Minami-Ward, Saiko-in, RyogokuKokugi-kan, Kisai Elementary School (Kazo-city, Saitama-prefecture), Masanobu Matsui, Company dub, Watchmaker's Takahashi, DULL-COLORED POP.

ワークショップ指導

総監督:
Jacek Petrycki
Paweł Łoziński
Rafał Listopad

編集協力:
Marek Skrzecz

編集:
Rafał Listopad

製作統括:
Magdalena Borowiec

製作統括（東京）:
Koichi Kuyama
Kihei Yamamoto

通訳・翻訳:
Koichi Kuyama

製作コーディネーター:
Katarzyna Pergół

企画（ポーランドTV局）:
Barbara Paciorkowska

製作統括（ポーランドTV局）:
Witold Będkowski

音声
Grzegorz Lindemann
Studio Melange

メイキング
Waldemar Czechowski

プロジェクト発案者
総監督

ミロスワフ・デンビンスキ

ポーランド国立ウッチ映画大学教員
- 20年以上にわたり記録映画を製作
- 約30本の映画を監督　代表作は
『オレンジ色の選択肢』（1989）『イカロス』（1999）『敗者と勝者』（2004）『ベラルーシ語の授業』（2006）『音楽パルチザン』（2007）
- 国際映画祭で80以上の賞を受賞
アムステルダム映画祭特別賞、オーバーハウゼン映画祭特別賞、ライプツィヒ映画祭特別賞、クラクフ映画祭「銅の棒馬」賞、サン・フランシスコ映画祭金門賞、ウッチ映画祭「白いコブラ」賞など

マチェイ・J・ドルィガス

ポーランド国立ウッチ映画大学教員
- 20年以上にわたり記録映画を製作　代表作は
『私の叫びを聞け』（1991）
『無重力状態』（1994）
『希望の声』（2002）
『人民ポーランドの一日』（2005）
- 20以上の国際映画祭で受賞
フェリック賞――欧州最優秀記録映画賞、クラクフ映画祭「銀の竜」、ベルボルン映画祭グランプリ、モンテカルロ映画祭グランプリ、イタリア特別賞、サン・フランシスコ映画祭金門賞、ウッチ映画祭「白いコブラ」賞など

指導者
総監督

マルツェル・ウォジンスキ

アンジェイ・ワイダ映画演出マスター・スクール教員
- 約40年にわたり記録映画を製作
- 約40作品を監督、代表作は
『どのように生きるべきか』（1977）
『高校卒業試験』（1979）
『マイクのテスト』（1980）
『ぼくの場所』（1986）
『ヨーロッパから89ＭＭ』（1993）
『何が起こっても不思議ではない』（1995）
『痛くないように』（1998）
『夜はまだ』（2008）
『局留めの手紙』（2008）
- 国際映画祭で50以上の受賞
オスカー（ノミネート）、フェリックス賞――欧州最優秀記録映画賞、オーバーハウゼン映画祭グランプリ、ライプツィヒ映画祭「金の鳩」賞、クラクフ映画祭「金の竜」「金の棒馬」賞、サン・フランシスコ映画祭金門賞、ウッチ映画祭「白いコブラ」賞など

ヤツェク・ブラヴト

アンジェイ・ワイダ映画演出マスター・スクール教員
- 30年以上にわたり、記録映画を製作
- 約30作品を監督、代表作は
『アブノーマル』（1990）
『死産』（2004）
『王冠をかぶったネズミ』（2005）
『戦士』（2007）
『夜はまだ』（2008）
- 60以上の国際映画祭で受賞
トロント映画祭グランプリ、グディニャ映画祭「銀獅子」賞、クラクフ映画祭「金の棒馬」「銀の棒馬」賞、マンハイム映画祭特別賞、サン・セバスチャン映画祭特別賞、ウッチ映画祭「白いコブラ」賞など

ヴィタ・ジェラケヴィチュテ

アンジェイ・ワイダ映画演出マスター・スクール教員
- 数年にわたり記録映画を製作
- 代表作
『統合失調症』（2001）
『壁の向こう』（2007）
『源』（2009）
国際映画祭での受賞歴
ヒューストン映画祭ゴールド・レミー賞、ウッチ映画祭「白いコブラ」賞、キェルツェ映画祭グランプリ

パヴェウ・ウォジンスキ

グダンスク映画大学教員
－20年以上にわたり記録映画を製作
－10数本の映画を監督　代表作は
『生地』（1992）
『階段』（1996）
『こんな話』（1999）
『姉妹』（1999）
『ドアとドアの間』（2004）
『化学』（2009）
－国際映画祭で多くの賞を受賞
ベルリン映画祭最優秀ヨーロッパ映画賞欧州大賞、ライプツィヒ映画祭特別賞、クラクフ映画祭「銅の棒馬」「銀の棒馬」賞、クラクフ映画祭「金の竜」賞、ウッチ映画祭「白いコブラ賞」、ライプツィヒ映画祭「金の鳩」賞など

ヤツェク・ペトルィツキ

－30年以上にわたり、映画製作、映画撮影に携わる
－撮影監督として100本以上の作品に関わる　代表作は
『田舎役者』（1978　アグニェシュカ・ホラント監督）
『アマチュア』（1980　クシシュトフ・キェシロフスキ監督）
『尋問』（1982　リシャルト・ブガイスキ監督）
『容赦なし』（1993　クライヴ・ゴードン監督）
『谷』（1998年　ダン・リード監督）
『隣家のピペリン』（2005年　ニノ・キルタゼ監督）
－国際映画祭で数十の賞を受賞
カンヌ映画祭国際映画批評家連盟賞、シカゴ映画祭ゴールデン・フゴ賞、モスクワ映画祭グランプリ、カンヌ映画祭最優秀主演女優賞、ベルリン映画祭最優秀ヨーロッパ映画賞、フェリックスヨーロッパ映画賞ノミネート（撮影部門）、英国アカデミー賞（撮影部門）、1999年「プリ・イタリア」賞、ビアリッツ映画祭グランプリなど

ラファウ・リストパト

グダンスク映画大学教員
- 数年前から記録映画・劇映画の編集に携わる
- 代表作は
『カティンの森』（2007年　アンジェイ・ワイダ監督）
『局留めの手紙』（2008年　マルツェル・ウォジンスキ監督）
『神のいない街』（2009年　ヤツェク・ペトルィツキ監督）
『一覧表作り』（2010年　パヴェウ・ウォジンスキ監督）
『他人の手紙』（2011年　マチェイ・ドリガス監督）
『黒い木曜日』（2011年　アントニ・クラウゼ監督）
－国際映画祭での受賞歴あり
ポーランド映画「鷲」賞　最優秀編集賞ノミネート
ポツダム映画祭編集賞
コシャリン映画祭編集賞など

● マテウシュ・ヴェルネル

ステファン・ヴィシンスキ枢機卿大学、ワルシャワ社会心理大学教員
映画批評家・理論家、文化哲学者
著書数冊、論文数10点
映画ワークショップ「ポーランド・ロシア　新しい視点」「ポーランド・イスラエル
新しい視点」の企画・実現にあたる

● アンジェイ・ムシャウ

アンジェイ・ムシャウ
- ウッチ映画大学教員
- 20年以上にわたり、記録映画を製作
- カメラマンとして50本以上の映画製作に関わる。代表作は
『生きていくための方法』（1993年　マリウシュ・フロント監督）
『無重力状態』（1994年　マチェイ・ドルィガス監督）
『アルヴォ・ペルト』（1998年　マリシュ・グジェゴジェク監督）
『希望の声』（2002年　マチェイ・ドルィガス監督）
『勝者と敗者』（2004年　ミロスワフ・デンビンスキ監督）
- 多くの賞を受賞している
モンテカルロ映画祭グランプリ、ウッチ映画祭「白いコブラ賞」、ベルリン映画祭
ヨーロッパ映画賞入賞、トロント映画祭「銀リンドウ賞」

● カタジナ・ペルグウー　プロジェクト・コーディネーター

● ヴィクトリア・オグネヴァ　プロジェクト・コーディネーター

● マグダ・ボロヴィェツ　プロジェクト・コーディネーター

● ヴェロニカ・ブワヴト　編集

● マレク・スクシェチ　編集

● プシェムィスワフ・フルシチェレフスキ　編集